

# ヨエル書とラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会——第三十九

Jeff Pippenger

2026-02-02

## 第三十九番

2024年の外的アルファの基礎試験に続く内的オメガの頂石試験は、「倉」の定義と、その倉に蓄えられている「食物」の定義を要する。試験は預言的であり、内的および外的な真理の系統を有する。宝石はジェームズ・ホワイトの残りの民なのか、それとも神の御言葉の真理なのか。両者である。

9/11において、神の民は小さな巻物を食べ、エレミヤの古き道々に立ち帰るよう召された。そこにおいて当時、その礎が据えられたのである。9/11においてはまた、ヨハネが黙示録十一章で測れと告げられたとき、彼は二つのものを測るよう命じられていたことが明らかになった。すなわち、神殿と、その中で礼拝する者たちである。さらに、異邦人が聖所と軍勢を踏みにじった1,260年に相当する外庭は、除外しておくようにと告げられた。聖所と軍勢とは、すなわち神殿とその中の礼拝者たちである。

2023年には、9/11に降臨した同じ御使いが再び降臨し、真夜中の叫びのメッセージの封印を解いた。そして2024年には、ミラー派にとってそうであったように、ローマの象徴がなおその幻を確認するのかどうかという外的な基礎的試験が課された。

天の「開かれた窓」は、神殿における内的なオメガの試練の到来と、「立ち帰れ」との呼びかけとを指し示す。この試練は、二つの象徴を識別することを求める。第三の天使が1844年に到来し、さらに9/11に再び到来したとき、ヨハネは神殿とその中で礼拝する者たちを測るよう命じられる。これにより、2023年において神殿と礼拝者を測るという予言的な働きが指し示される。マラキは、「倉」とは何か、「食物」とは何か、という問いを提起する。ミラーの夢においても、同じ問いは、「小箱」とは何か、「宝石」とは何か、となる。

ミラーの夢は、天の開かれた窓を、黙示録十九章における勝利の教会が白い亜麻布をまとい、万軍の主の軍勢の白馬に乗るために引き上げられる地点として指し示している。その開かれた窓こそ、マラキ書の祝福または呪いが注ぎ出される場所である。ミラーの開かれた窓とは、塵芥が取り除かれ、宝石が小箱に収められる場である。

天の窓についての最初の言及はノアの物語にあり、その窓が開かれたとき、四十日四十夜、雨が降った。窓が開かれたとき、箱舟のうちには八つの魂があった。紅海における洗礼は、ヨルダンを渡るに至るまで続く四十年の荒野の放浪の端緒となった。のちに、まさにその場所で洗礼を受けたキリストは、四十日のあいだ荒野に追いやられた。キリストは復活すると、キリストの洗礼によって予型的に示されていたように、昇天に先立って四十日のあいだ弟子たちを教えた。

教会が戦う教会から凱旋の教会へと移行するとき、三十歳のダビデ王が四十年間統治する。凱旋の教会は、預言者・祭司・王という三職によって表象される。二十二年に及ぶ務めを開始したとき三十歳であった預言者はエゼキエルであり、彼は天が開かれたときにその務めを始めた。

第三十年の第四の月の五日に、わたしがケバル川のほとりで捕囚のうちにいたとき、天が開かれて、わたしは神の幻を見た。エゼキエル書 1:1。

三十歳にしてヨセフは祭司として治め始めたが、彼は海に横たわる竜たるエジプトが世界統一政府を樹立することを可能にする激化する危機をもたらすイスラムの東風に直面した。その危機のさなか、ヨセフは肉を倉に集め入れた。

2023年7月、荒野において一つの声が聞かれ、続いてユダ族の獅子が真夜中の叫びのメッセージの封印を解き始めた。2024年には、基礎的な外部アルファ試験が二つの階級を分け、封印の解き明かしは継続した。そして今、2026年、再び二つの階級を分ける神殿内部のオメガ試験が到来した。

契約の使者としてのキリストが多くの人々と堅く契約を結ばれた聖なる一週は、外庭と聖所に当たる。1844年10月22日から、ミカエルが立ち上がる時まで（ステパノが石打ちにされたその聖なる週の終わりにミカエルがそうされたように）は、至聖所である。春の祭りはその聖なる週に成就し、祭りのアルファであり、秋の祭り、すなわち第一日のラツパの祭り、十日目の贖罪日、そして十五日から二十二日にかけての仮庵の祭りは、祭りのオメガである。

同様に、再臨に関する予表は、象徴的な祭儀において指し示された時に成就されなければならない。モーセの制度の下では、聖所の清め、すなわち大贖罪日は、ユダヤ暦第七の月の第十日に行われた（レビ記 16:29-34）。その日に大祭司は、全イスラエルのために贖いをなし、こうして彼らの罪を聖所から取り除いたのち、出てきて民を祝福した。ゆえに、われらの大祭司なるキリストが、罪と罪人を滅ぼすことによって地を清め、待ち望むご自身の民を不滅の命を与えて祝福するために現れる、と信じられた。第七の月の第十日、大贖罪日、すなわち聖所の清めの時であり、1844年には10月22日に当たったこの日が、主の来臨の時であると見なされた。これは、2300日が秋に終結するという、すでに提示された証拠と調和しており、その結論は抗しがたいものと思われた。

マタイ25章のたとえにおいては、待機とまどろみの時の後には、花婿の到来がある。これは、預言および予表に基づいて先に示した論証と一致していた。これらの論証は、それらが真実であることについて強い確信を与え、「真夜中の叫び」は数千の信徒によって高らかに宣べ伝えられた。

大津波のごとく、その運動は全土を席卷した。町から町へ、村から村へ、さらに遠隔の田園地帯にまで及び、待ち望む神の民が十分に奮い立たされるまで続いた。この宣言の前には、昇る太陽の前に初霜が消え失せるように、狂信は姿を消した。信徒たちは自らの疑いと当惑が取り除かれるのを見、希望と勇気がその心を鼓舞した。この働きは、神の御言葉と御霊の制御的影響を欠き、人間的興奮のみがあるときに常に現れる諸々の極端から免れていた。それは、古代イスラエルにおいて、主の僕たちからの

譴責のメッセージに続いて起こった、へりくだりと主への立ち帰りの時期と同質の性格を帯びていた。あらゆる時代における神の御業を特徴づける性質を備えていたのである。恍惚的な歓喜はわずかで、むしろ、心の深い吟味、罪の告白、そして世を棄てることがあった。主にお会いするための備えこそが、苦悶する霊の重荷であった。そこには、忍耐強い祈りと、神への無保留の献身があった。The Great Controversy, 400.

春の祭りは聖週において成就し、そののち初雨、すなわちアルファの雨がペンテコステにおいて注出され、こうして秋の祭りにおける後の雨の注出を予表した。これらの春の祭りはレビ記23章1節から22節に記されている。秋の祭りは23節から44節に記されている。2300年を数えると1844年に至る。春の祭りについて22節、秋の祭りについても22節。レビ記23章には22節が二組ある。

ラッパの祭りは、十日後に裁きが行われることを告げる警告であり、仮庵の祭りは、贖罪日に赦された罪のゆえの喜びを祝う祝祭であった。祭りの後の安息日と第八日は、地上における千年の安息日の休みを象徴する。

しかし、愛する者たちよ、この一事を見落としてはならない。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようである。第二ペテロ 3:8

第一の天使は審判の開始を告知した。そして、その預言的次元においては、ダニエル書の「終わりの時」である1798年がラッパの祭りの成就である。しかし、1840年8月11日には、1798年に封印が解かれた第一の天使のメッセージが、第二の災いの預言の成就によって力を与えられた。イスラームは、近づきつつある審判の日を告げるラッパの祭りの警告の一部をなす。

見ようとする者には、秋のラッパの祭りと仮庵の祭りは、その中間に裁きが置かれたアルファとオメガの祭りを象徴している。これらの祭りがレビ記二十三章において示されているのは偶然ではない。二十三という数は贖罪の象徴である。最初の祭りが第七の月の第一日にあり、最後の祭りが第二十二日に終わるのも偶然ではない。ラッパの祭りはヘブライ語アルファベットの第一の文字に当たり、贖罪の日はその中間の文字に当たり、仮庵の祭りはヘブライ語アルファベットの第二十二番目の文字に当たる。

レビ記二十三章二十三節から四十四節は、「真理の枠組み」の中に配置された二十二節から成る。中心に置かれた第十日は試みを指し示している。というのも、十は試みの象徴であり、また贖罪の日こそ、失われた者の反逆が記録され、解決される場所であり、その反逆はヘブライ文字の第十三字によって表象されているからである。ヘブライ語の「真理」という語の中間の文字は第十三字であり、それは第七の月の第十日に符合し、道標として、ヘブライ文字および特定の日に固有の預言的屬性を帯びている。十と十三の和は二十三である。七十は十と七の積であり、第七の月の第十日もまた七十に等しく、これは猶予期間の終結の象徴である。

そのとき、ペテロがイエスのもとに来て言った、「主よ、わたしの兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何度までわたしは彼を赦すべきでしょうか。七度まででしょうか」。イエスは彼に言われた、「わたしはあなたに言う。七度までとは言わない。七十の七倍までである」。マタイによる福音書 18章21、22節。

古代イスラエルのために四百九十年が切り分けられた。それらの年は二千三百年から切り分けられ、七十週として示された。それゆえ、イエスは、猶予期間の期限が四百九十年であることを示された。すなわち、ダニエル書九章において「七十」週によって表されている四百九十年である。

あなたの民とあなたの聖なる都について、背きを終わらせ、罪に終止符を打ち、咎に対する贖いを成し遂げ、永遠の義をもたらし、幻と預言を封印し、至聖所に油を注ぐために、七十週が定められている。ダニエル書 9:24

「cut off」と訳されているヘブライ語は、旧約聖書においてこの節にのみ用いられており、「定められた」または「布告された」を意味する。これは、通常「cut off」と訳される語とは異なり、その通常の語は、創世記十五章における契約の第一段階でアブラムがいけにえを切り分けたことに由来する語である。イスラエルが四百九十年の猶予期間を持ち、その後神の契約の民として断たれることは、「定められ」「布告されて」いた。二つの異なる「cut off」がある。すなわち、より大きな数から「七十」という数によって「切り取られた」猶予期間としてその時期を表すものと、ヨエルの「新しいぶどう酒」が彼らの口から「断たれる」ときに猶予期間が閉じられるというものである。七十は猶予の終結を表す。

秋の祭りは、ヘブライ語「真理」の三つの段階を有する。秋の祭りはレビ記23章23節に始まり、贖罪日の中間の道標は第十日と第十三の文字で、すなわち23となり、仮庵の祭りは第二十二日に終わり、その後祭りに続く大いなる安息日があり、この記述は23章44節で終わる。

レビ記という名称はレビ人の祭司職を意味する。春の祭りは23章1-22節に、秋の祭りは23章23-44節に掲げられている。春の祭りは二十二節で示されており、ヘブライ語のアルファベットは二十二文字である。秋の祭りもまた二十二節で掲げられている。ラッパの祭りは、贖罪日における裁きの近づきを告知する。次いで、仮庵の祭りは七日間続き、第七の月の二十二日に終わる。七日の初めは礼典的安息日であり、八日目も同様であって、それは七日間の祭りの翌日であった。第一日と第八日とによって、その第八日は七に属する第八の象徴となる。

イスラエルの子らに告げて言え。「この第七の月の十五日は、主に対して七日間の仮庵の祭りとする。初日には聖会を開き、その日にはいかなる労役もしてはならない。七日の間、主に火によるささげ物をささげる。第八日にはあなたがたにとって聖会とし、主に火によるささげ物をささげる。これは厳粛な集会であり、その日にはいかなる労役もしてはならない。」... また、第七の月の十五日に、地の産物を取り入れたとき、あなたがたは七日間、主に祭りを守る。初日は安息日とし、第八日も安息日とする。レビ記 23:34-36, 39.

第八日の祭儀的安息日は、仮庵の祭りに続く千年期の安息日を表している。古代イスラエルが荒野で四十年間放浪したことは、仮庵の祭りの日々に仮庵に住むことによって記念されるが、それは後の雨の降り注ぎを指し示すだけでなく、天使たちが保護のために神の忠実な者たちを丘陵や山々へと導くヤコブの苦難の時をも表している。

艱難の時に、私たちは皆、町々や村々から逃れたが、悪しき者どもに追われ、彼らは剣をもって聖徒たちの家々に押し入った。彼らは私たちが殺そうとして剣を振り上げたが、その剣は折れ、藁のように力なく落ちた。そこで私たちは皆、昼も夜も救いを叫び求め、その叫びは神の御前に上った。太陽が昇り、月はとどまった。川々は流れるのをやめた。暗く重い雲が湧き上がり、互いにぶつかり合った。しかし、静まりきった栄光の澄みわたる一角がただ一つあり、そこから多くの水の響きのような神の御声が出て、天と地を揺り動かした。天は開いたり閉じたりして、騒然となった。山々は風の中の葦のように震え、鋭い岩塊を四方に投げ散らした。海は鍋のように煮えたぎり、石を陸に打ち上げた。また、神がイエスの来臨の日と時を告げ、その民に永遠の契約を授けられたとき、神は一句を語っては休止され、そのことばが全地にとどろき渡る間、間を置かれた。神のイスラエルは、目を天に注いで立ち、エホバの口から出て最も激しい雷鳴のように全地にとどろき渡るそのことばに耳を傾けていた。それは恐ろしいほど厳粛であった。一句の終わるごとに、聖徒たちは「栄光あれ！ ハレルヤ！」と叫んだ。彼らの顔は神の栄光に照らされ、シナイから降りて来たときにモーセの顔が輝いたように、その栄光をもって輝いた。悪しき者どもは、その栄光のゆえに彼らを直視することができなかった。そして、神の安息日を聖として守ることによって神を尊んだ者たちの上に尽きることのない祝福が宣言されたとき、獣とその像に対する勝利の大いなる叫びが上がった。

かくして、地が安息すべきヨベルの年が開始された。レビュー・アンド・ヘラルド、1851年7月21日。

イエスが再臨し、地は千年間安息する。これは、土地の第七年の安息年とヨベルの年によって予表されている。レビ記二十三章三節においては、人のための第七日の安息日が当章の導入として示されているが、この章は七に属する第八で結ばれており、また、土地の安息のための第七年の安息年を表している。

主はモーセに仰せられた。「イスラエルの子らに告げよ。あなたがたが聖なる会合として告示すべき主の定め祭りについて、これらこそがわたしの祭りである。六日の間は労働が行われるべきである。しかし第七日は全き休息の安息日、聖なる会合であり、その日には一切の業をしてはならない。それは、あなたがたのすべての住まいにおける主の安息日である。」レビ記23:1-3

第二十三章のアルファは第七日の安息日であり、同章のオメガは、地が空虚である千年期であって、これは土地のための第七年の安息年とヨベルの年によって予表されてきた。同章のアルファは、第七日の安息日に始まり二十二節で終わる春の諸祭である。これに対し、同章のオメガは、第七の月の二十二日に終わり、その後、土地の第七年の安息年を表す第八日の祭儀的安息日が続く。

一節から二十二節は、聖所における天の大祭司としてのキリストの務めを表し、二十三節から四十四節は、至聖所におけるその務めを表している。レビ記は祭司職を象徴する書であり、キリストの大祭司としての奉仕を表している。第七日安息日のアルファは創造にまで遡り、オメガである第七年の安息（安息年）は新しくされた地にまで及ぶ。レビ記二十三章は、歴史的には、創造から再創造に至るまでにわたっている。

預言のメッセージにおける喜びまたは恥は、「真夜中の叫び」のメッセージを有する者、あるいは偽りのメッセージを有する者を象徴する。この真理が叙述に織り込まれるまでは、恥を生じさせる問題は見落とされる。本物の油を有する者は、この点を見落とすことがない。喜びは、罪を取り除かれた者たちによって表され、彼らは仮庵の祭りを祝う者たちとして示されている。

そして、ことばは肉となって、私たちのうちに宿った。私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みとまことに満ちていた。ヨハネによる福音書 1:14

「住まわれた」と訳されるギリシア語は「幕屋を張る」を意味する。イエスは肉となって、わたしたちの間に幕屋を張られた。彼はわたしたちの人性、わたしたちの幕屋、わたしたちの天幕、わたしたちの仮庵、わたしたちの肉をお取りになった。ペテロはこのように述べている：

まことに、私がこの幕屋のうちにいる限り、思い起こさせることによってあなたがたを奮い立たせるのが至当であると考えます。まもなく、わたしたちの主イエス・キリストがお示しになったとおりに、私はこの私の幕屋を畳まねばならないことを知っているからである。第二ペテロ 1:13、14

パウロは次のように述べた：

私たちは知っている。この地上の、すなわち天幕である私たちの住まいが取り壊されても、私たちには神からの建物、すなわち人の手で造られたのではない、天にあって永遠の家があることを。というのも、この天幕にあって私たちは呻き、天からの私たちの住まいを上から着せられることを切に望んでいるからである。すなわち、着せられていれば、裸の者として見いだされることはないからである。実際、私たちはこの天幕にいる者として重荷を負って呻いているのであり、裸になることを望むのではなく、むしろ上から着せられることを望む。それは、死ぬべきものがいのちによって飲み尽くされるためである。コリント人への第二の手紙 5章1-4節。

仮庵の祭りは、天の窓が開かれるときになされる十四万四千人の封印を象徴している。十四万四千人の罪が取り除かれるとき、聖霊は勝利の教会の上にとりなく注がれる。十四万四千人に対する裁きは完了し、封印を受けた者たちは、仮庵の祭りにおいて象徴されているとおり、聖霊の力のもとに第三天の大なる叫びを宣べ伝えるために出て行く。

私たちの体は神殿であり、また天幕、すなわち幕屋である。仮庵の祭りを祝うためにエルサレムに集まった者たちは、自らの罪が消し去られたことを祝っていた。モーセは荒野で幕屋を建てるために用いられた。そして、イエスは常に初めによって終わりを示されるから、終わりにおける仮庵の祭りは荒野で仮庵に住むことによって祝われた。

このゆえに、天の召しにあずかる聖なる兄弟たちよ、わたしたちの告白の使徒にして大祭司であるキリスト・イエスに思いを向けなさい。彼は、彼を任命された方に対して忠実であった。ちょうどモーセがその家のすべてにおいて忠実であったように。というのは、この方は、家を建てた者がその家よりもいっそうの誉れに値するのと同様に、モーセよりもさらに多くの栄光にふさわしいとされたからである。すべての家はだ

れかによって建てられるが、しかし、すべてのものを造られたのは神である。そしてモーセは確かに、その家のすべてにおいて、後に語られる事柄についての証しとして、しもべとして忠実であった。しかしキリストは、御子として、ご自身の家を治めておられる。その家とは、わたしたちである。ただし、わたしたちが確信と希望の喜びとを終わりまで堅く保つならば、である。ヘブル人への手紙 3:1-6。

モーセは、神が幕屋なる神殿を建てるために用いられた忠実なしもべであったが、大祭司にして使徒であるキリストは、そのしもべモーセにまさる栄誉を有する。モーセの幕屋なる神殿から、ソロモンの神殿、ヘロデによる四十六年の改築を経た神殿、四十六本の染色体を備える人間という神殿、そして1798年から1844年に至るミラーライトの神殿に至るまで、すべての家は神によって建てられた。神殿の諸顕現に関する預言的系譜において、それはエデンの園に始まり、罪の後には園の門において、さらに洪水の後にはモーセに至るまでの祭壇において続くが、三つの主要な道標はモーセ、キリスト、そして十四万四千人である。

モーセとキリストは古代イスラエルのアルファとオメガを表しており、また、彼らはともに人性と神性の結合を表すが、その結合は十四万四千人によっても象徴されている。第三の天使の到来に際し、ヨハネの黙示録十一章において、ヨハネは神殿を測るよう命じられるが、同じ天使が9/11に到来したときにも、ヨハネは再び神殿を測るよう命じられる。いずれの場合にも、一千二百六十日に当たる外庭は測量の対象から外すようにと告げられている。2023年にも同じ天使が到来し、神の民はいまや神殿を測るよう召されている。一千二百六十日、すなわち三日半は2023年に終わり、その時点から日曜法の直前に至るまで、神殿は建て上げられる。2024年は基礎が据えられた年であり、同時に、「小さき事の日を軽んじた」一団として反逆が顕在化し、彼らは、幻を確立する象徴に関するミラーの同定に異議を唱えた。

また、主の言葉がわたしに臨み、こう言われた。「ゼルバベルの手がこの家の基を据えた。その手はまたこれを完成しよう。あなたは、万軍の主がわたしをあなたがたのもとへ遣わされたことを知るであろう。小さき事の日をだれが侮ったか。彼らは喜び、ゼルバベルの手にある下げ振りを見るであろう。あの七つのものは、全地を行きめぐる主の目である。」ゼカリヤ書 4章8-10節。

幻を確立するのはローマであるとするミラーの同定を退けることは、土台を退けることであり、すなわち「小さき事の日を軽んじる」ことである。ミラー派運動は、第一の天使と第二の天使に属するアルファの運動であり、十四万四千人の運動は第三の天使のオメガの運動である。それは威力においてアルファの二十二倍である。この預言的意味において、ミラー派運動の土台は「小さき事の日」である。ハバククの二枚の板に表されているいかなる基礎的真理をも軽んじることは、死に至ることである。というのも、ダニエル書十一章十四節において確立されているその幻は、ソロモンが同定したものと同一の幻だからである。

啓示がないところでは、民は滅びる。しかし、律法を守る者は幸いである。箴言 29:18。

頭石の幻は驚くべきものである。というのも、それは、基礎の隅のかしら石が、頭石としては二十二倍の力をもっていることを指し示しているからである。2024年のアルファの基礎試練は外的・知性的な封印の使信であり、2026年のオメガの神殿試練は内的・霊的な封印の使信である。一方は獣の像と刻印を識別し、他方は神の像と刻印を識別する。そのオメガの内的試練は、終末の出来事の文脈において定義されねばならないミラーの夢の二つの象徴によって表されている。倉とは何か。食物とは何か。

これらの内容は次回の記事で続けます。

イエスの時代のユダヤ人の婚姻は、しばしば数か月から一年にわたって、三つの主要な段階を経て進行した。第一の段階は婚約と呼ばれる法的婚姻であり、その時点で婚姻は法的に成立するが、新婦と新郎は別居したままで、新郎は花嫁のための場所を用意するため父の家に戻った。ゆえに、ヨセフの妻マリアは、まだ同居する以前からすでに彼の妻と呼ばれていた。この期間における不貞は姦通と見なされた。

待機期間は不確定で、数日、数週間、あるいは数か月に及ぶこともあった。この不確定性は、たとえ話の本質的要素である。父は、花嫁の貞潔を確認するため、最長一年まで待つこともあった。花婿は、自らが戻る正確な日や時を告げなかった。いつと定めるのは父の決定であったからである。ゆえに、花嫁は婚礼が迫っていることは知っていたが、その時がいつかは知らなかった。この不確定性は意図的であり、父が花婿に行って花嫁を迎えよと命じるまで、関わる一切の事柄は猶予されていた。

父が「行って花嫁を迎えよ」と言うと、花婿は夜、友人たちを伴い、叫び声を上げ、ラッパを吹き鳴らしてやって来た。イスラエルの地では日中の暑熱の中での長距離の移動が過酷であるため、それを避けるべく、これは常に夜に行われた。街路灯がなかったうえ、行列は数時間に及ぶこともあったので、松明と油が必要であった。行列の最中に宣言された、古代ヘブライ人の婚礼における実際の儀礼的表現は、「見よ、花婿来たる！」であった。

たとえに登場する乙女たちは、無関係な者たちではなく、花嫁の介添人であり、彼女とともに待機し、行列に加わることが期待され、いかなる時刻にも備えること、また花婿の家へ至る道を照らすために自らの油を携えることへの責任を負っていた。松明は燃え尽きるのが早かったため、道のりが長引く場合に備えて予備の油を持参することが不可欠であった。油は共同で分かち合われることはなかった。

古代の婚礼の行列と婚姻においては、遅れは通常のことであり、文化的に問題とはならなかった。遅れは予期されており、眠ることも普通であった。区別は眠りにあるのではなく、覚醒にあるのでもなく、備えにこそある。愚かな乙女たちは、賢い者たちのように遅れを見越して備えることをしなかった。だれもが眠るのが常であった。というのも、法的な婚約から婚姻の成就に至るまでの期間は一年に及ぶこともあったからである。

花婿の家に行列が到着すると、婚宴が始まり、戸は固く閉ざされ、遅れて到着した者は入場を許されなかった。これは残酷ゆえではなく、慣習によるものであった。というのも、戸が閉ざされた後になって戸を叩く者は、行列の一員ではないことを意味したからである。

イエスは比喩的イメージを創作しておられたのではなく、また、しばしばそうされたように、このたとえについての説明をお与えにならなかった。説明をお与えになる必要はなかった。というのも、これらの文化的細部は、イエスの聴衆によって完全に理解されていたからである。イエスが指し示しておられたのは抽象ではなく、文字通りの東方の婚礼であった。

その詳細は、ヘブライの証言によって、またローマ時代およびギリシア時代の歴史家によっても、全面的に裏づけられている。

ミシュナ（西暦2世紀。ただし、西暦70年以前の神殿時代の慣行を伝えている）

タルムード（後代の編纂物であるが、先行する慣行を引用している）

ヨセフス（1世紀のユダヤ人歴史家）

ラビ的婚礼式文および法的論議

ユダヤ地方を見聞したギリシア・ローマ人

ヨセフスは、整然とした「婚礼の手引書」を与えてはいないが、彼が前提としている法的・文化的な細部は、ミシュナおよびタルムードの記述と正確に一致している。ミシュナが主要な典拠である。

このたとえは紀元1世紀のユダヤ人の聞き手に非常に強く響いた。というのも、マタイ25章においては説明を要するものが何一つなかったからである。真夜中の到来は通常のことであり、ともし火と油は当然の必需品であり、法的な婚約の成立から真夜中の行列に至るまでの間に遅れが生じることは予期されており、扉を閉ざすことは通例の慣行であった。締め出された乙女たちは恥をこうむり、イエスの時代のユダヤ人の聴衆にとっては、愚かな乙女の恥は全く当然の帰結とみなされた。儀礼を十分に承知していたイエスの聴衆は、愚かな乙女たちにいささかの同情も寄せなかった。というのも、行列に加わるよう求められたどの乙女にとっても、準備は絶対的な責務であることを誰もが知っていたからである。これらの事実はユダヤ人の聴衆にとってあまりにも自明であったため、イエスはこのたとえ話について何ら説明を加える必要がなかった。